

12皿の特別料理

清水義範





12皿の特別料理藏

江苏料理学院图书馆
书章

清水義範



角川書店

12皿の特別料理

平成九年一月三十日 初版発行

著 者——清水義範

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目三三

〒100 振替〇〇一三〇・九一九五二〇八

電話／営業部〇三・三三三八・八五二一

編集部〇三・三三三八・八四五一



印刷所——暁印刷株式会社

製本所——株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本は小杜角川ブック・サービス宛にお送り
ください。送料は小杜負担でお取り替えいたします。

© Yoshinori SHIMIZU 1997 Printed in Japan
ISBN 4-04-873024-X C0093

12

皿

の

特

別

料

理

装画／東海林さだお

目次

おにぎり

7

ぶり大根

33

ドーナツ

59

鱈の
プロバンス風

81

きんぴら

105

鯛素麺

129

チキンの魔女風

153

カレー

177

パエーリヤ

201

そば

225

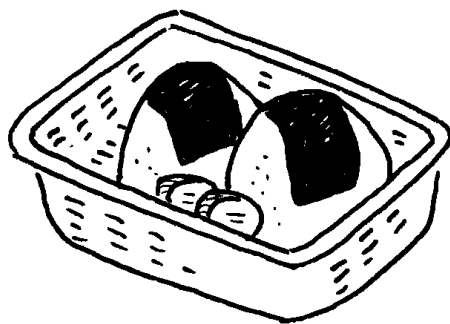
八宝菜

251

ぬか漬け

275

お
に
ぎ
り



1

夫が交通事故にあつて入院したというしらせを、規子^{のりこ}は夫の会社の海外事業部からの電話で受けた。

一瞬、目の前が暗くなり、相手の声がすーっと遠くなった。

「もしもし。奥さん。大丈夫ですか、きこえますか」

すぐに規子は氣を取り直した。日常的ではない状況下のそのしらせだったため、ことさらに動転してしまったのだが、考えてみればそうであればこそしつかりしなければいけないのだった。

「ええ。大丈夫です。それで、どんな様子なんですか」

「それが、ここにもまだ十分な情報が届いているわけではないんです。ボンベイ支局の者が、とりあえずわかつていることだけをしらせてきているという段階でして」

規子の夫の今井賢司^{いまいけんじ}は、インドのボンベイへ出張で出かけ、そこで交通事故にあつたと

いうのだ。

「現在わかっているポイントだけをお伝えします。まず、今のところ命に別条はないという事です」

「今のところ、ですね」

規子にはまだ安心することができなかった。海外という、手の届かないところで夫がその難にあっているのだと思うと、不安ばかりがどんどん大きくなっていくのだ。

「ええ、つまり……。詳しいことがわかっていないので、私もうかつなことは言えないんです。とにかく、いっしょにいたうちの社員の報告では、重傷を負って緊急手術を受けたということなんです。そして、手術がとりあえず終って、まだ今井課長が麻酔からはさめていないというところで第一報を入れてきたわけです。それで、むこうの医者は、手術はうまくいった、心配ない、と言っているそうです」

「そうですか」

規子は安堵した。何であれ、医者が手術は成功したと言っているというのは、涙がにじむほどに心強いしらせだった。安堵して初めて、規子は胸の谷間あたりがドクドクと脈動していることに気がついた。

「とりあえず奥さん、会社のほうへ来てはいかがでしょう。ここにいればその後の連絡も入ってくるでしょうから」

「そうします」

考えをまとめる余裕がないままに、あわただしく事は進行した。大学生である二人の息子に置き手紙をして、規子は夫の勤める商社会社へ出向いた。

その海外事業部で、連絡を待つ。夫の上司や部下が力づけの言葉をかけてくれたが、詳細がわからないうちはそれも虚しかった。

日没後になって、ようやくあらましのことがわかった。

ボンベイの市街地の大通りを現地詰めの社員と二人で横切ろうとして（インドでは人は信号のないところで平気で道を横断するのだそうだ）、トラックにはねられたらしい。すぐに設備の整った大病院へ運ばれた。

肋骨を二本と、左足の骨を折っていた。頭蓋骨と、脊髄には損傷なし。

手術はうまくいき、経過も問題ない、ということだった。しばらく入院する必要があるが、心配する必要はなさそうだと。

とりあえず、規子は落ちつきを得た。

もちろん、心配がまるでないわけではない。頭の骨は折れてないとしても、そこを強く打っていることはあるかもしれない。脳に出血がおこっているのが見過ごされているのかも。そうだとすれば、そろそろ怖いことである。

そして、仮にそういう医療ミスはひとつもないのだとしても、国内の病院に入っている

のではないというのは、つい変なことまで考えてしまうもので、落ちつかない。インドの医療レベルを軽く見るのではないけれど、言葉の通じないところで入院というのはいやなものだ。何か日本ではやらないような危険な治療をするのではないか、という取り越し苦労までしてしまう。

「奥さん、パスポートはお持ちですか」

と、夫の同僚が言った。

「ええ、去年家族でハワイへ行きましたから」

「じゃあ、明日の便で現地へ行って下さいよ。チケットはこちらで手配します」

「インドへですか……」

「そうです。それが一番いいと思うんです、やはり家族がそばにいるのが何よりですから」

規子は少し考えて、うなずいた。

「わかりました。まいります」

「何時の便がとれたか、などはこちらから連絡します。うちからも誰か一人同行させましょう。ですから、とりあえず家にお帰りになって、旅行の仕度をして下さい」

「はい」

「明朝にはご連絡を入れます。その上で、成田で何時に待ちあわせ、と決めればよいでし

よう」

そのように決めて、あわただしく家に戻った。帰宅していた息子たちに事情を告げる。そしてなんだかふわふわと落ちつかない気分のまま、海外旅行用の荷造りをした。

そして、翌日の午後の便でインドへ。

ボンベイに着いたのは夜半で、その日は同行してくれた瀬戸^{せと}という夫の部下の案内で、ホテルに入る。

言葉も不如意なら、西も東もわからぬ心細い状況である。ボーイにチップをやって追いつけてくれた瀬戸が、私は支社のほうに顔を出してきます、といなくなってしまうと、見知らぬ世界に置き去りにされたような気がした。

だが、すっかりしなくちゃいけないんだ、と自分に言いきかせる。夫の近くで、力になつてやれるのは私だけなんだ、と。

瀬戸は、明朝なるべく早く来てくれるそうである。それまでは、どんなに焦ってもできないことがないのだ。規子は異国のホテルのベッドで落ちつかぬ気分のまま眠った。

2

翌日、瀬戸ともうひとり、事故があった時いっしょにいたというこちらの支社の坂溝^{さかみぞ}と

いう若い男と三人で、タクシーで病院へ行った。タクシーの中で坂溝が事故の様子を説明してくれて、規子は少し気分が悪くなる。

人だらけの雑沓^{ざつとく}。

車はやたらにクラクションを鳴らし、人を気にもかけずびゅんびゅんとぼす。

そんな道路を、みんな平気で横切る。車の直前を走り抜けるのだ。車は速度を落しもしない。

坂溝がそんなふうに、道を横断した。一〇メートルほど先にトラックが迫っていたが、十分に横断可能と見て。いっしょにいた夫は、一瞬立ち止まった。無茶だ、と思ったのだろう。ところが次の瞬間、インドではこれが常識かと思ったのか、思い直して坂溝のあとを追った。

一瞬ためらった分だけ、遅れた。

トラックの角が夫をはねとばし、夫の体は五、六メートルころがった。

血は、足の傷から出ているだけだったという。だが、上着のボタンは二つともとれ、シャツにトラックの塗料がこびりついていたとか。

夫は声を出すことができず、ヒューヒューと苦しい息をして、しかし意識はあったそうだ。失敗してしまっただよ、とでも言うように、苦笑いをしていたとか。

そういう話をききながら、規子は額に脂っこい汗を流していた。